

原点 それは87歳の祖父との旅行

ロン毛にジーンズ姿の“粋”な祖父が、私は大好きだった。
国内・国外と、祖父との旅は数えきれない。

そんな祖父も糖尿病と闘い、下肢筋力の低下・肺気腫・心臓病と多くの病気を患っていた。私も金曜日になると岡山倉敷に住む祖父の自宅まで車で走らせ、祖父に付き添うようになった。

ある日、祖父が力なく言った。「じいちゃん、もう長くないかもしれない」
そんな一言を受けいれたくなくて、「またどっか行こうよ」と返す私。
すると、窓の外を見つめながら、突然何かを思い出したように、祖父がつぶやいた。

「徳島県鳴門の人丸神社に行きたいな…」

徳島県鳴門市は祖父が生まれ育った町だった。そこに祖父が少年時代お世話になった神社がある。調べてみると、岡山から車で2時間。なんとかなる距離だ。

家族の反対を押し切って、祖父と祖母、そしてその娘である私の母と4人での小さな旅がスタートした。ただ、祖父の喜ぶ顔が見たい。それだけだった。

山の斜面にある小さな神社。

鳥居から境内までには、二階建てぐらいの高さの階段がある。

祖父は車いすからその階段を見上げ、ゆっくりと立ち上がった。

ベッドからトイレまで数メートルしか歩けない祖父が、地に足がついているのを確かめるように、一步一步階段を昇り始めた。どれぐらいの時間経っただろう、時計の針が止まったような感覚。自然と涙があふれた。

無事、境内に着くと、まるで生まれたばかりの赤ちゃんを見るような笑顔で、周りを見渡す祖父。たまたまそこにいた50代ぐらいの神主と、1時間ほど立ったまま話が進む。
私たち家族も知らない、祖父の昔話だった。

旅には感動があるんだ。見えない力があるんだ。そんな確信に、魂が揺さぶられた瞬間。それが、しゃらく旅倶楽部の原点になった。

誰もが、旅行に行けるわけではない。そんな社会に気づいた。そして自然に思った。

多くの人にこの喜びを伝えたい。その思いを行動に移すのに、さほど時間はかからなかった。共感してくれる友人が3人、私の生まれ育った町、神戸に集まった。

2004年 人丸神社にて

そこには現実という大きな山

しゃらく旅倶楽部を始めるには、旅行業の取得や資金も必要になる。だが、貸してくれる金融機関もなかったので、昼も夜も夜中も皆で働いた。

日中は自分たちの事業で、夕方から居酒屋でアルバイト、そんな日々が2年間。

6畳一間で4人暮らしをし、寝食を共にすることで経費を削減した。

もう嫌だ、こんな生活我慢できない。そう逃げたしたくなったのは一度や二度ではないけれど、お墓参りする度に、亡き祖父に励まされた。

そして2年後、私たちしゃらく旅倶楽部が形になった。

リピーター率76%という事実

2008年4月からスタートしたしゃらく旅倶楽部。

大きく宣伝はしていないけど、口コミで多くのお客様にご利用を頂いた。

一人一人のお客様と向かい合ってきた。

道中の安全はもちろんのこと、旅への想いを感じ取ることに必死になった。

今は特に、旅行前の不安、無理だと思ふ心、心のバリアを取り除くことに力を入れている。そして、遠くは、北海道や鹿児島まで、いろいろな場所に「想い」を積んで、エスコートヘルパーがお客様と共に旅に出る。

「またお願いしますね」その言葉がいつも待ち遠しい。

その結果、76%のお客様がリピーターになってくださっている。

多い方では月に1回ペースで、少ない方でも年に1回～2回。

二年先のご旅行までご予約いただいていることが、私たちは嬉しい。

お客様皆様が、私たちを家族のように思ってくださいることが何よりも嬉しい。

旅をあきらめないために…

私たちはしゃらく旅倶楽部を始めて約2年間、多くの方と旅を共にしてきた。
そんな経験を振り返って一番強く思うことは、
旅をあきらめないでほしいということ。
家族や周りの方が無理だと決めつけないでほしいということ。

旅には魔法の力がある。
いつもと違う景色。
いつもと違う食事。
いつもと違う空気。
全てを体に取り込むことで、新しい明日が始まる。
日常生活から離れる事で、心のリハビリに繋がる。

あきらめる前に、決めつける前に、
この冊子で事例を見ていただければ、きっと新たな日常が生まれる。
そう信じて。

特定非営利活動法人 しゃらく
理事長兼事務局長／エスコートヘルパー 小倉譲 拝

